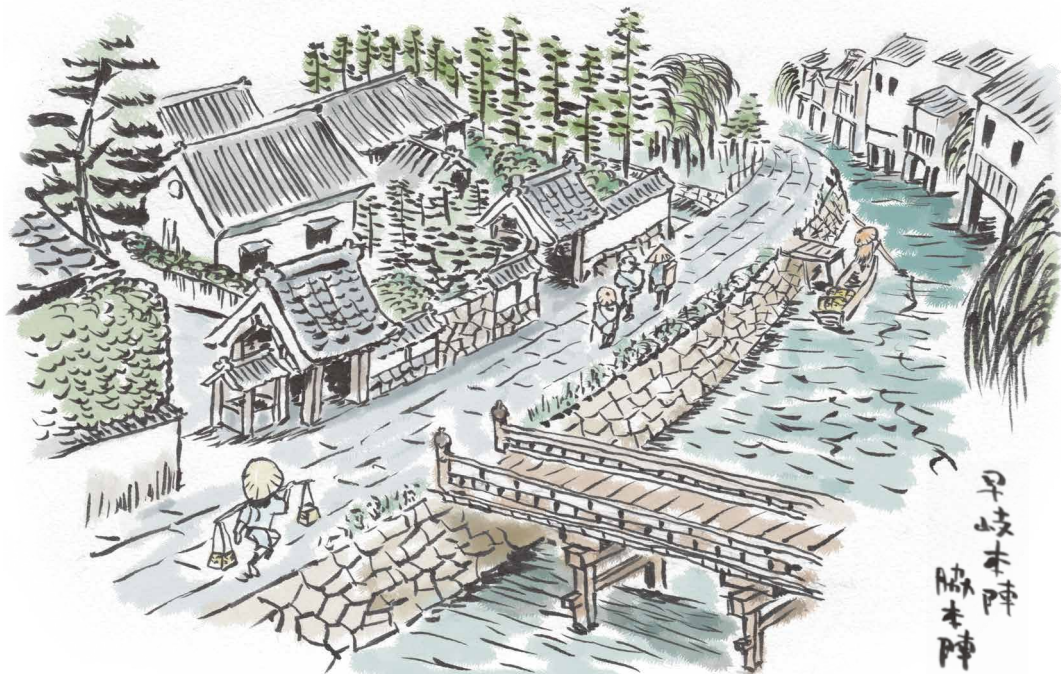




佐々さるくの会 主催

# 県北の古い港町・早岐 早岐の歴史と名勝をめぐる

- ①早岐駅 → ②早岐一里塚 → 鍵型道路 → ③龍吐水<sup>りゅうとすい</sup> → ④渡し場・高札場  
⑤蛭子神社・陶石陸揚場・土井の上<sup>いび</sup>井樋 → ⑥吉田松陰宿泊地 → ⑦早岐本陣と脇本陣  
⑧潮の目 → ⑨大念寺鐘楼山門 → ⑩早岐神社(速来宮) → ⑪押役所跡・起業会社跡



2019.11.10

# ①早岐駅

明治30年(1897)7月九州鉄道の武雄～早岐間が開通。

同時に早岐駅が開業。駅舎は同年11月に完成。

県内最古の木造建築物といわれ、建築当時の骨組みや天井が残る近代化遺産であった。

同時に早岐機関区も創設され、その給水塔が赤レンガの建物である。

エネルギー革命により早岐機関区のSLは昭和47年3月になくなり、昭和51年に電化され、機関区は廃止となる。

平成26年(2014)九州新幹線西九州ルート開業に伴う高架事業によって、それまで長崎駅に隣接してあった車両基地の大半を「佐世保車両センター」として早岐駅に移転する。

同時に旧駅舎は営業を終了し、新駅舎となる。



明治時代の早岐駅(開業時)



大正12年の早岐駅(大幅な改築が行われている)

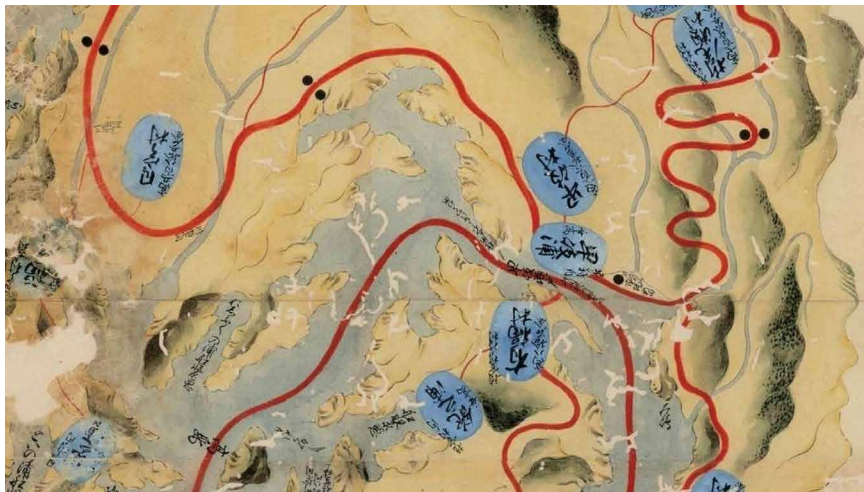


平成23年に取り壊された旧駅舎(大正13年に大幅に改築された建物)

## ②早岐一里塚

一里塚とは街道を通る人達の目印となるように一里(約4km)ごとに置かれたもので、通常は土で盛られた塚の上に榎などを植えていた。

元禄12年(1699)松浦老岐守領分絵図の中に、早岐川から小森川口にかけて「市場新田」の記入があり、平戸街道はその海岸堤防上を通り、その中ほどに一里塚の表示がある。

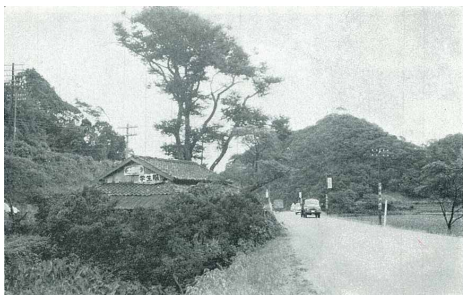


松浦老岐守領分絵図 元禄12年(1699)

文化9年(1812)12月に伊能忠敬は早岐周辺を測量している。

測量日記には「小森橋を渡り海辺の街道を進み右に一里塚の上に名松あり」と記しており、当時は立派な松の木が植えられていたことがわかる。

ちなみに早岐の次の一里塚である大塔の脇崎一里塚には、昭和30年頃まで大きな榎の木が健在していて、榎茶屋一里塚と呼ばれており、僅かに江戸時代の面影を残していた。



昭和30年頃の榎茶屋一里塚(大塔の脇崎一里塚)



## ◎大火の記録

早岐のまちは度々大きな火事に見舞われる。記録に残っているだけでも江戸時代に大規模な火災が3回起き、町のほとんどが焼土と化している。明治39年に町は再び大火に見舞われ、東町・中町・西町のほとんどが焼き尽くされ、大念寺・西蓮寺の寺院には及ばず沈火したという。この明治に起きた大火によって新たな区画整理の下、現在の東町・中町・西町の町並みは出来た。

平成26年から27年にかけて佐世保市教育委員会が行った「早岐瀬戸遺跡発掘調査」の報告のなかで「1層目に明治期の火災層、2層目は17世紀後半から19世紀までの火災面及び整地層である」としており文献記録に残る火災面が確認された。

|      |      |                    |
|------|------|--------------------|
| 延宝1  | 1673 | 早岐大火、西蓮寺等焼失        |
| 宝永4  | 1707 | 宝永地震による被害を受ける      |
| 延享3  | 1745 | 早岐大火、家屋150戸焼失      |
| 宝暦8  | 1758 | 早岐大火、家屋194戸、土蔵4戸焼失 |
|      |      | }                  |
| 明治39 | 1906 | 早岐大火、商家40戸焼失       |

## ③龍吐水(りゅうとすい)

早岐1丁目の前川さん宅には龍吐水なる物がある。これはもともと大念寺の床下にあった物を郷土史家である前川雅夫氏が譲り受け、保管していたものである。当初は痛みがひどかったため、木の部分は浦桶店、鉄枠は鈴山鉄工所にて復元した。(昭和63年11月末)

以下、前川氏からの説明文より抜粋



### <由来>

江戸時代の龍吐水には大小ありますが、これは大型のもので、早岐 中町と彫られているので、中町の住民団体が使っていたものと思われます。

メーカーは「大阪阿波座戸尾町三丁目 井上利兵衛」「本家」「納」の焼印もあります。大正、昭和の鉄製の手押しポンプは数多く残っていますが、江戸、明治の木製のものは珍しく、県内には雲仙市の旧有明歴史民俗資料館にもあります。ただし、長さ1m程の木の筒先がなくなっているのは両方とも同じです。

### <使い方>

この消化器の使い方は初期消火と延焼防止です。家の家事は台所や暖房器具、タバコの火などが原因ですが、火がついて燃えだし、天井に火がつくほど大きくなるまでが約15分。この15分間に消すのが初期消火です。

木製の龍吐水は大人2人で運び、バケツリレーで水を入れ、筒先を動かして使いました。放水すると二階建ての屋根に届くほどでした。

初期消火ができず、天井に火がつくと、次の15分で家は燃え上がり、焼け落ちます。こうなると昔はその家の消火を諦め、周りの家に水をかけて延焼をふせぎました。このときにも龍吐水が活躍しました。それでも消せない、周りの家を次々と壊し、空き地をつくって延焼を防ぎました。

復元前には黒く焦げた部分があったことから、明治39年の大火の際には実際に使われていたと思われる。この龍吐水は今となっては貴重な当時の火事現場を見た、物言わぬ生き証人である。

## ④渡し場・高札場

マンションの建築により撤去されているが、以前までは「渡し場の碑」があった。

現在のように自動車が普及する以前は、対岸の針尾島の生島、西彼杵半島へここから船で通っていた。

江戸時代には藩からの通知や罪人の人相書きを掲げる「高札場」でもあった。

昭和11年(1936)に観潮橋の前身である開閉橋が架かるまでは、この場所は針尾島や西彼杵半島の人々や生活必需品の交流の拠点であった。



渡し場の碑

## ⑤蛭子神社

明治25年(1892)9月初旬に東町・寿町の商人によって建立された格式のある祠。縁起の良い宝袋や大鯛の姿が見事に刻まれている。近くに住む古老の話によると、以前は寿町の海岸沖合いの海中に鎮座されていたという。海の潮が満ちれば海中に立ち、潮が引けば干潟の上に全体が現れるといった姿を第二次世界大戦当時までは見ていたのをはっきりと覚えているという。その後、護岸工事や駐車場整備の関係で、場所を転々としたのち、今の場所に落ちついている。



## 陶石陸揚場

天草陶石や網代石などの陶器の原料である陶石を陸揚げしていた場所。平成26年～27年に行われた発掘調査では、大量の陶磁器が出土しており、三川内産だけでなく有田や波佐見産の陶磁器も出土したことで、有田・三川内・波佐見の陶器の積み出し港として伊万里や唐津とともに重要な役割を果たしていたことが明らかになった。



# 土井の上の井樋(いび)

現在の早岐の町の基礎となる土地が出来た干拓に関わる水路である。

承応2年(1653)藩として初めての干拓事業が行われ、**早岐新田**、**宮崎新田**が造られた。その時の**井樋(排水路)**であった。もう一つ先にも水路があり「**矩手(かねのて)**」と呼ばれている。この水路も井樋で直角に曲がる堤防を築いたことに由来している。

時期は分からないが昔は水路に水門があったという。

干拓前の小森川は、権常寺町の天満宮付近から早岐駅地下を通り「土井の上」井樋に出て、海に注いでいたといわれている。正保4年(1647)の絵図を見てみると確かに今よりもかなり瀬戸が入り込んでいることが確認できる。干拓以前の原始の早岐の海岸線がはっきりと描かれている。

松浦旧記によると「**早岐三枝より嶺の原迄長さ三百間の堤防を築き、同じく宮崎に二百五十間の築堤をなす。為に新田十二町歩を生じ、人家四十余軒を建設す**」とある。

※「三枝」とは、西蓮寺がある辺り、もしくは早岐川と2つの川の合流地点(杏林病院の裏)辺りとの説があり、はっきりしない。  
※「嶺の原」とは権常寺天満宮付近のことをいう。 ※三百間=約545m ※工事期間は2年間



小森川 早岐川?

正保4年(1647)絵図



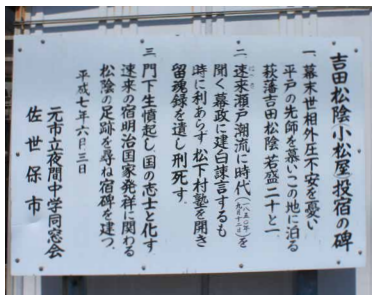
土井の上の井樋

## ⑥吉田松陰の宿泊地

藤津屋旅館跡地に最近まで**吉田松陰(小松屋)投宿の碑**という看板が立っていた。嘉永3年に平戸を訪れた吉田松陰は早岐に嘉永3年9月12日に訪れている。まだ21才の若者であった。

西遊日記には「**早岐に至りて宿す**」とは書いてあるが小松屋という名は確認できない。

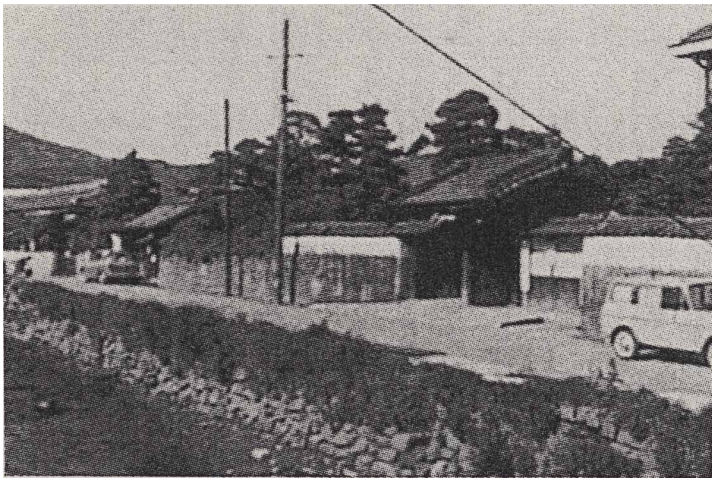
当時この場所に小松屋という旅館があり、吉田松陰がほんとに宿泊したのか、この看板の根拠となる話があれば聞いてみたい。



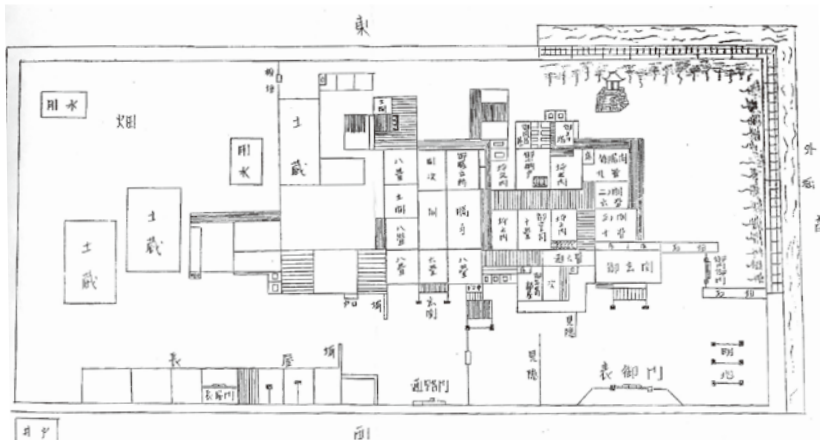


## ⑦早岐本陣と脇本陣

早岐本陣は寛文年間(1661~1672)の頃、早岐浦で廻船問屋を営み、造り酒屋でもあった谷村家が建て、藩公に寄贈した。早岐では本陣のことを「お茶屋」と呼んだ。本陣と同時に脇本陣も建設。昭和の初め頃、本陣の表門や建物は建て替えられた。脇本陣の表門、屋根の造りは江戸時代のまま残されていたが、平成5年9月に広田の住吉神社に移築され、瓦葺切妻造り棟門の手水舎として利用されている。大正の終わりまでは豪勢な築庭や老松が茂り、石垣・祠・井戸、殿様が宿泊休憩した上段の間の座敷などが残っていたが、現在では、江戸当時のものは裏の駐車場にある松浦家の家紋が彫られた石の祠と、住吉神社に移された脇本陣の表門のみとなった。



本陣表門(手前)、脇本陣表門(奥) 昭和39年当時



早岐本陣絵図(佐世保市立図書館蔵)

## ⑧潮の目

奈良時代、和銅6年(713)に編纂された肥前国風土記に早岐瀬戸の様子が記載されている。

この門に潮がくるのは、潮が東に落ちれば、西に湧き上がる。

湧く音は、雷の音と同じである。よって速来門という。

また繁った木があり、もとは土について、枝先は海に沈んでいる。

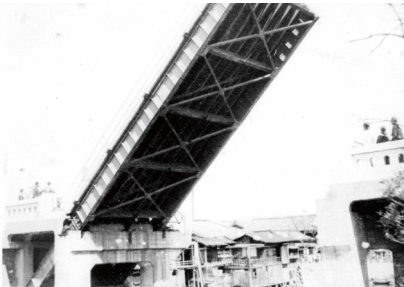
海藻の生育が早く、朝廷への献上物としている。

また、速来津姫と呼ばれる酋長が土蜘蛛(先住民)を支配してこの地を治めていた。

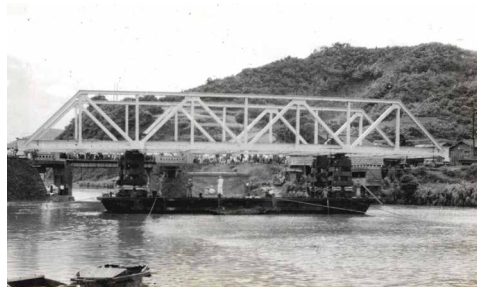
その幅が狭いことで知られる早岐瀬戸だが、瀬戸の幅は時代によって変化している。もっとも古い江戸初期に描かれた正保絵図(1647)には「針尾ト早岐トノ間狭所にて拾七間」としてあり瀬戸の幅は35mと書かれてあるが、江戸末期に作成された「平戸領地方八奇勝図」には「狭き処五、六丈」とみえ、幅は20mに幅狭している。八奇勝図に描かれている突き出しを造営したことに起因していると思われるが、これはおそらく延宝1年(1653)に行った干拓以降の時期に行った工事の一環であり、勝磯の一丁突き出しも同時期に造営されたのではないかと思われる。この突き出しの造営により、干満時の溢水を緩和できるようになり船が停泊しやすくなった。

その後昭和11年(1936)突き出しの真上に開閉橋が架橋された。これは当時帆船が入港していたためであり、早岐側の突き出し付近に開閉に使用する巻上げ機室があった。帆船が入ってくるたび、橋近くに住む松下某氏がかけつけて巻上げ機を操作して開閉していたという。

やがて機帆船の入港も激減し、昭和29年(1954)に道路の整備また西海橋の架橋に伴い、開閉橋に平行して拡幅された橋が新たに架橋され、開閉橋は撤去された。おそらく開閉橋が架橋された時の工事の際に元々の突き出しの上にコンクリートが舗装されたのだろうか、もしくはその後の護岸工事の際か、現在の瀬戸の幅は江戸末期の「平戸領地方八奇勝図」に書かれた20mから更にみじかくなり、約10mという世界でも珍しい幅の狭い海峡となっている。



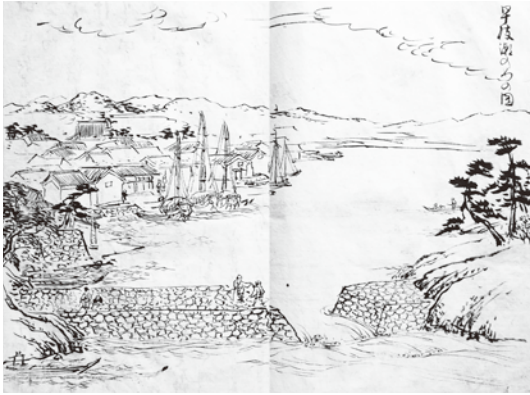
開閉橋



観潮橋架橋工事(奥にこのあと撤去される開閉橋が見える)



## 奥島家文書「南遊紀行」



享和二年(1802年)奥島家文書「南遊紀行」で描かれた早岐瀬戸  
この頃にはすでに突き出しがあり、左手前には七郎宮の鳥居も見える

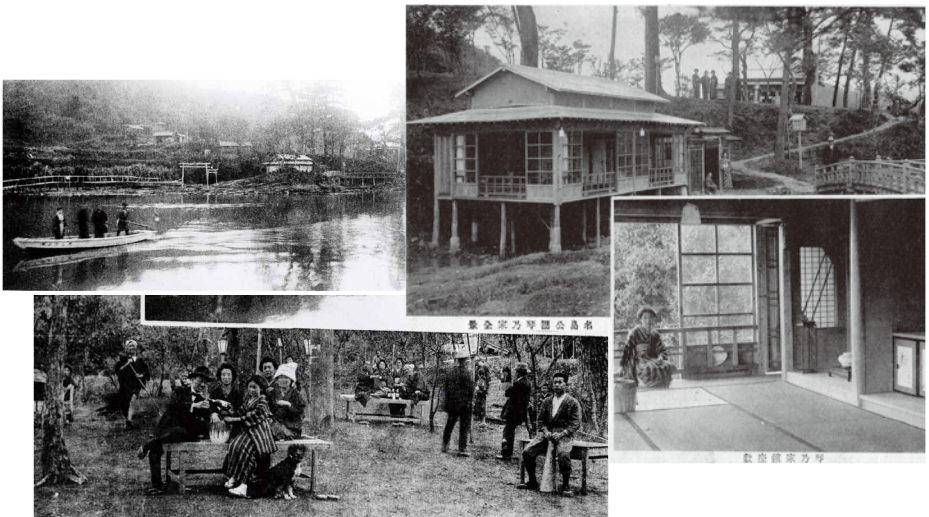
## 平戸領地方八奇勝 潮之目



嘉永元年(1848年)平戸領地方八奇勝には  
狭き所五六尺(5.6尺)=約20mとある

## ◎名島公園

明治期以降になると瀬戸の針尾島側に名島公園ができた。公園内には「琴乃家」という料亭  
ができ、芸者がお客をもてなした。そこでは潮の激しさを鑑賞する観潮会も行われ、潮止ま  
りの時は渡し舟や芸者と客を乗せた屋形船が行き交う風光明媚な観光名所となった。  
その後「国松」という木造三階建ての立派な料亭が建ち、現在の潮音荘へと引き継がれている。  
近年カヌーの聖地として日本中から瀬戸の急流に魅了されたカヌー愛好者がやって来て盛  
り上がっている。風土記が速来門と書いた時代から、平戸八景となった江戸時代を経て、大  
正時代には名島公園ができる。いつの時代も人々を魅了してやまない瀬戸の急流である。



琴乃家料亭

琴乃家料亭

## ⑨大念寺鐘楼山門

大念寺は天文10年(1541)川尻隠岐守が創建した浄土宗の寺院である。

天正14年(1586)の広田城の戦いに勝った松浦鎮信(法印)がここで戦死者の大供養をおこなったと言われている。

本堂は明治10年(1877)に再建されていたが平成3年正月に全焼した。その後市教育委員会の試掘が行われていて、弥生時代の遺構であることがわかった。現在は再建されている。

山門は江戸末期の嘉永3年(1850)10月、当山22代寒誉上人によって再建されたと境内の碑に書いてある。鐘楼堂を兼ねた袴腰鐘楼の山門で、昭和54年(1979)2月に市文化財に指定された。



## ⑩早岐神社(速来宮)

早岐神社は明治30年(1897)創建。

明治になるまでは現在の裏参道といってよい百段の石段(大正3年表参道として造成)の上り口にあった浄漸寺が愛宕山にあった稻荷宮・愛宕宮・祇園宮・皇大神宮・八十八箇所石仏・奥の院大師堂なども取り仕切っていた。

一方、里村稗田には常樂院神徳寺があり、熊野権現も祀ってあった。

明治になって熊野権現が熊野神社となり、明治4年(1871)早岐村の村社となった。

明治30年(1897)には稗田から熊野神社が愛宕山に遷座され、浦町にあった七郎神社、立町にあったとも廣天満宮などが合祀され早岐神社となった。

昭和36年(1961)古来からの呼び名を使い年社号が「速来宮」に改められた。

浄漸寺は開基養老年間(720年)頃。早岐七ヶ村では寺格も高く、多くの末寺をかかえていた。明治の廃仏毀釈で一時廃寺となった。早岐住民の強い願いで明治13年(1880)上原に再建された。現在早岐神社の裏手にある一軒家は古来より浄漸寺の奥の院があったところで、今も浄漸寺の持ち家である。

### ◎芭蕉塚(胡蝶句碑)

「もろこしの俳諧問わん飛ぶ胡蝶」と書かれてある。

台石に「文政7年(1824)10月12日、浄漸寺の住職晋恒法印が建て・・・」と記し、発起人34人の俳名が並べて刻んである。「浪花隠士二毛堂子金曳」を師として、早岐の商人たちが風流を好み、句会を開いていたことがわかる。

## ◎早岐城

愛宕山に早岐城があった。

古くは12世紀の中頃、伊万里を治めていた山代岡(松浦久の孫)の孫にあたる人物がこの丘に移住し、早岐氏を名乗ったと言われているがはっきりしない。

その後も早岐氏を名乗る武士が数人記録に残っている。

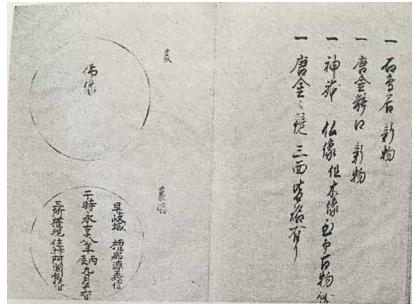
早岐神社の前身である熊野権現は早岐にとって大きな歴史的財産を残している。

第一に、唐金(青銅)鏡の鏡三面である。表には仏像が刻まれ裏には鏡の寄進者の名前や寄進期日が刻まれている。

寄進者 早岐城檀那 源義信

寄進年月日 永享八(1436)年丙辰九月十六日

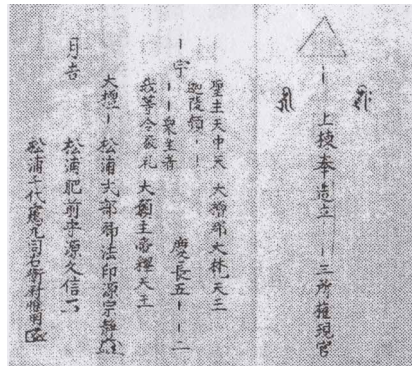
室町時代の戦国の世が始まるうとする時代、早岐地方は早岐城主源義信なる小名主が支配していた事を示す大切な史料である。早岐駅裏裨田に出る踏切を渡ると右側道路脇に「早岐様」と呼ばれる石祠のお堂がある。この早岐様は源義信の墓と伝えられている。



「田舎廻」に記録された青銅鏡の銘

第二に、慶長5年(1600)の記載がある梁札には平戸松浦第一代藩主松浦法印鎮信、二代久信、三代宗陽公隆信の幼名が大檀那として記載され、加えて右衛門尉惟明(後藤惟明)も大檀那としている。

惟明は広田城の戦いの際に平戸方として早岐に陣をとっていたとの記載もあり、おそらく宗家松浦が平戸に敗退あとは早岐一帯は平戸松浦の領土として広田城や早岐城を築き大村の侵攻に備えていた。



「田舎廻」に記録された熊野三所権現梁札

現在の早岐神社がある愛宕山に城があったというはっきりとした記述は見当たらないが、海からの出入り口である瀬戸を一望でき、360度見渡せる絶好の地、今も残る神社裏手の「段築」の遺構、周辺の「城の腰」「陣の内」という地名、このようなことからこの場所に山城が造られていたことは間違いないだろう。



# ⑪押役所跡・起業会社跡

大念寺横から早岐小学校までの一帯を**小路**という。早岐の政治、交通の中心地。

押役所、代官所、馬立て場などもあり、**平戸街道**と**有田街道**の分岐点。

藩境での重要な警察治安の仕事を受け持つ**押役所**があり、向後崎・高島・木原・舂ノ峯など番所も管轄していた。早岐・広田・折尾瀬・崎針尾・江上の五ヶ村を納める**代官所**と**庄屋屋敷**が今の早岐小学校にあった。

押役所の跡にできたのが起業会社である。

元平戸藩士であった**牧山有格**が失業した士族たちを救済する目的。早岐の有力な商人の協力を得て明治15年(1882)に設立した。

その後、明治24年(1891)早岐銀行と改称、浜田町に支店を置いた。明治40年(1907)佐世保銀行と改称し、浜田町支店を本店とし早岐を支店とした。

その後、昭和14年(1939)年商業銀行を合併し、親和銀行となった。



## ◎江戸時代の戸数と人口比較

|                 |    | 早岐浦  | 佐世保浦 | 賤津浦  |
|-----------------|----|------|------|------|
| 寛文4年<br>(1664)  | 戸数 | 136戸 | 49戸  | 109戸 |
|                 | 人口 | 704人 | 202人 | 363人 |
| 天保13年<br>(1842) | 戸数 | 215戸 | 110戸 | 106戸 |
|                 | 人口 | 778人 | 471人 | 855人 |

※史談会・寶亀会員の「古文書に見る早岐の歴史」より抜粋